

中山道宿場町探訪 第5回墨俣宿・竹鼻宿

2025年8月30日9時30分に大垣市墨俣町の「一夜城の太閤出世橋」前にある駐車場に6名が集合した。連日の40度になる猛暑を迎えての宿場町探訪となりました。今回のボランティアガイドさんは、墨俣宿担当の奥田良和さんです。さらに案内人2名が加わり総勢9名となりました。平均年齢もほぼ我々「中山道探訪団」と同じ70才でした。

① 墨俣宿探訪

最初に頂いた「すのまた観光MAP(左図)」を参考に、墨俣一夜城⇒寺町界隈⇒脇本陣跡⇒少し南に移動して、鎌倉街道(一番古い墨俣宿)に向かいました。一夜城の内での案内は館長さんにお願いでき、展示資料の説明をして頂いた。太閤出世橋の前で撮った写真には、背景には一夜城(当時は無かった)が写っています。





ON 41

美濃路の歴史の集大成

9 美濃路墨俣宿脇本陣跡(安藤家)

QR MAP



歴史が育んだ美しい風景

大垣市景観遺産

から令和まで400年近く歴史で屋敷が同時に残っている例は少なく、特筆すべき家であると言えます。

濃尾震災直後(明治25年・1892年頃)に再建された母屋部分と、明治46年に増築された旧脇本陣の座敷は、倒壊前に建てられた家(延享2年・1745年頃)の古材が再利用されており、270余年の時を経て古の趣を今に伝えています。

三田に空けた大名行列が行き交ったといわれる墨俣宿には、町人が旅人を喜んで迎え入れる風土が今なお息づき、民家として現在も一般公開されています。

墨俣安藤家は、室町時代に北方城主を務めた安藤伊賀守守就(1503年生)の系譜とされ、岐阜城の稻葉家、大垣城の氏家家と共に西美濃三人衆として知られる領主階級の人です。安土桃山時代には名字帯刀を許され、奥濃の様・兼藤道三や細田信長の武将を務め、力を誇りました。江戸時代には町民の身分となり通り酒屋を営むものの、移動交代の宿として本陣・津井家にならび脇本陣を務め、多くの大名らを迎入れました。大きな行列では300人を超えたとされ、お泊りの道具「布団315組・火鉢30斗・疊46疊…」と名古屋錦鏡3,000個が残った記録も残っています。

このように、脇本陣を務めるには私財が多く必要だったため、江戸



ON 73

大正建築と商家の趣が息づく

9 岐島屋百貨店(現・岐島屋)

QR MAP



ON 42

歴史と町人の祈りが重なる

9 寺町界隈

QR MAP

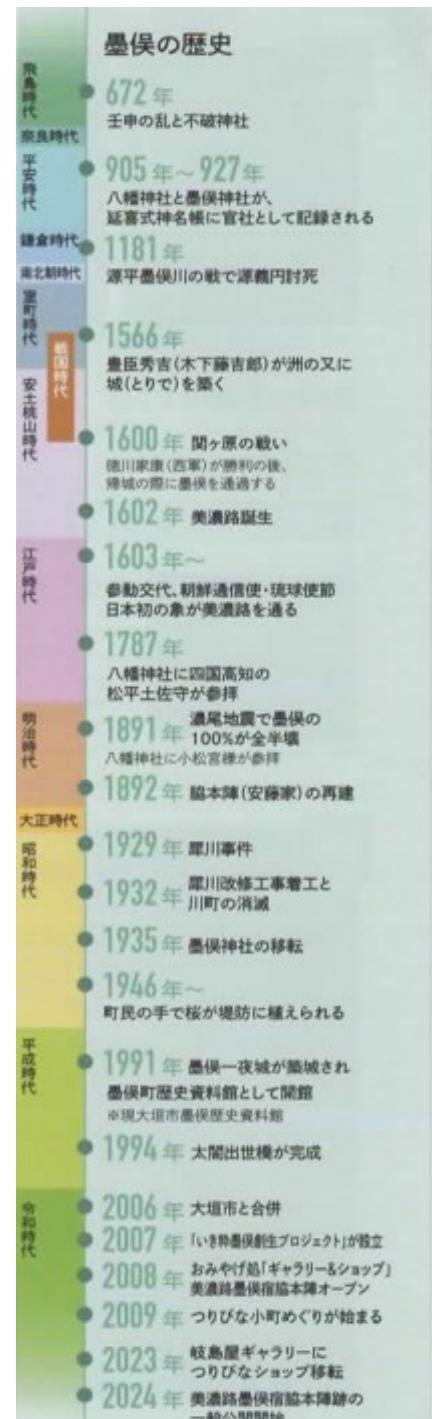
寺町界隈は、墨俣の歴史と繁栄が色濃く残るエリアです。真宗大谷派の寺院5つと浄土宗の寺院1つが1km圏内に集まり、古くから地域の人の信仰の中心になってきました。飛電橋で有名な光受寺、安藤家創建で脇本陣の門が移築されている本正寺、平安時代に天台宗の寺院として創建された清福寺、樺の丸柱や剛削が見事な広寿寺、樋桃笑地蔵が安置されている明台寺など、風格ある建築が織りなす静かな空間です。



一夜城の前



墨俣宿脇本陣の前



岐島屋百貨店では、「つりびな」がところ狭しと掛けてありました。現在の脇本陣は民泊ステイとして宿泊もでき、古民家を再開発したゆったりと空間が、癒しの心を醸し出してくれます。



旧墨俣宿は現在に位置よりもっと南に在ったそうで、「鎌倉街道（不破神社付近）」沿いが本来の墨俣宿が在った場所との事でした。ここにはボランティアガイドの奥田さん宅が在って、暑い中、昼の休憩をさせて頂きました。この地帯は輪中地域特有の石垣が高く積まれ水害の被害に対処した造りになっています。中でも蔵が一番高い所に在り、昔は船も有ったそうです。その蔵の中から奥田家に伝わる貴重な「関ヶ原合戦図」を拝見することができました。

② 羽島市(竹ヶ鼻宿)の探訪

みんなで昼食を済ませた後、「羽島市歴史民俗資料館」に向かいました。そこでボランティアガイドさんは、は岩田源五さんです。（次ページに岩田さんの資料を抜粋）その昔「竹ヶ鼻城」がこの付近に在った事や、羽柴秀吉（のちの太閤、豊臣秀吉）による水攻め（一夜堤）の話をして頂きました。当時の竹鼻は、墨俣の下流域に在り長良川と揖斐川とが合流している輪中になります。そのため、この辺りを流れる川（逆川）は、反対の北

へと流れています。さて、次は皆さんの希望で「一夜堤」の中心地となった「太閤山」に行きました。本来は少し離れた所に在ったそうですが、現在は小高い山になっています。



I. 羽島市を通った街道

II. 美濃国 竹ヶ鼻城 小牧長久手の戦い時に水攻め 関ヶ原の戦い

III. 円空上人と円空仏

IV. 佐吉大仏（竹鼻大仏）

I. 羽島市を通った街道の概要

まず羽島市を通ったみち（街道）の主たるものは、「鎌倉街道」及び「美濃路」が有ります。「鎌倉街道」の道筋は、近江国から美濃国へ入り、居增（今須）・垂井・赤坂・笠縫（大垣市）を経て、墨俣で墨俣川（現・長良川）及び尾張川（現・境川）を渡り尾張国へ入った。尾張国であった小熊・足近（共に羽島市）を経て、黒田（現・一宮市木曽川町）から熱田へと通じていたが、墨俣から黒田に至る羽島市内のルートは、木曽川派川の流路の変遷によってはっきりとしていない。墨俣に宿があったが、美濃路の墨俣宿ではなく、その南にある「上宿」・「下宿」付近であったらしい。そこから墨俣川・尾張川（小熊の渡し）を渡り小熊を経て、北宿・南宿（羽島市足近町）を通過。ここにも足近宿が有ったようである。ここから及川（およびがわ）を渡り北及の児神社前を通り、玉の井を経て黒田宿に通じていた。「美濃路」は、近世の「東海道」と「中山道」を結ぶ脇街道であり、東海道の熱田（名古屋市）から中山道の垂井（岐阜県）に至る。その間に宿駅が7ヶ所あり、道程が55km有ったと言われる。別名に、関ヶ原の合戦で勝利した徳川軍が凱旋した街道で「吉例街道」ともいわれた。羽島市内のコースは、起（愛知県一宮市）から木曽川を渡り、新井（羽島市正木町）から不破一色・須賀・南宿・坂井をへて小熊へ入り、小熊川（境川）と大江川（岐阜市茶屋新田）を渡って墨俣川（現・長良川）の渡しを渡って墨俣宿に入った。

【名勝・史跡】羽島市 「起渡し」木曽川の起渡しは、上・中・下の三ヶ所あった。

○上は「常渡し場」=新井村～起の金刀比羅神社に至る。

○中は「宮河渡」と称し新井村の燈明河渡～起の大明神社前へ=起渡し石灯台

○下は「船橋河渡」と称し、起宿高札場～三ツ柳村の稻荷神社付近=三ツ柳の船橋跡の碑

「一里塚跡」=街道の一里（約4km）ごとの目印 ○不破一色の一里塚 ○東小熊の一里塚 境川の「小熊の渡し跡」

【その他の街道等】

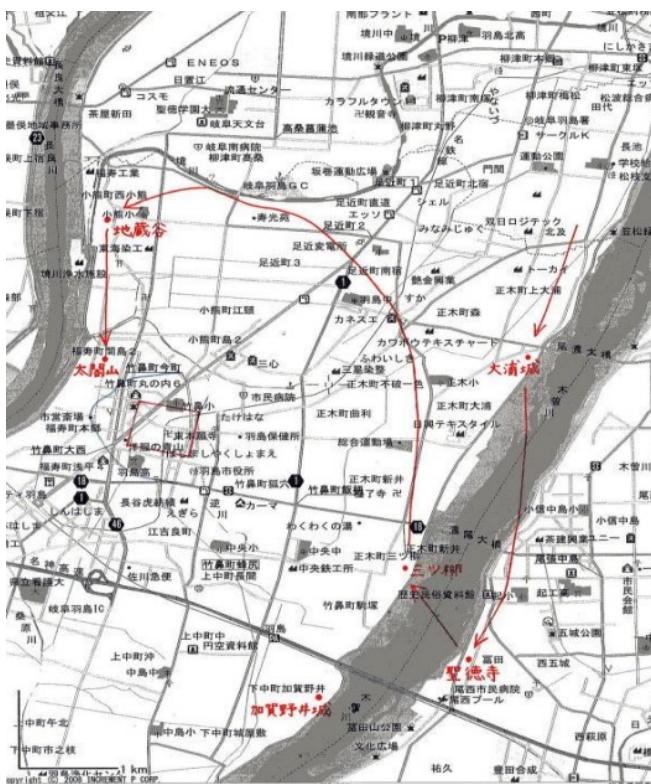
竹鼻街道（駒塚道）や名古屋街道（八神街道）があり、美濃路の脇街道として、人＆物流の要衝として交流が盛んであった。竹鼻街道は、尾張藩の家老石河家（駒塚に在居）の名古屋城への登城のために開いた街道で、その後竹鼻の街作りに努力され駒塚から竹鼻を経由し、本郷村で長良川を渡河し安八を経て大垣宿へ通ずる竹鼻街道として整備した。名古屋街道は、尾張藩の家老で八神城の城主である毛利家が名古屋城への登城をするために開いた街道で、美濃路の清洲宿から木曽川の八神を経て八神城に通ずる街道である。

II. 美濃国 竹ヶ鼻城 (岐阜県羽島市竹鼻町)

そもそも築城は応仁年間、竹腰尚隆によるものとされていますが、その後土岐氏、斎藤氏、織田氏と時代の権力者に従っていきました。戦国期は織田信雄の家臣であった不破源六広綱が居城としていました。この城は小牧・長久手の戦いにおいて尾張へ出陣した羽柴軍によって水攻めにされたことで有名です。

○竹ヶ鼻城の水攻め

(資料) 竹ヶ鼻城の水攻めまでの足取り



秀吉の水攻めと称せられるものは4回行われているが、第1回は、天正10年の備中国「高松城」、第2回目が天正12年の当「竹ヶ鼻城」、第3回目は天正13年の紀州「太田城」、第4回目が天正18年の小田原征伐の際に行った「忍城」の水攻めである。当市内に於ける戦闘である竹ヶ鼻城の戦いは、加賀野井城のように、疾風迅雷的な即戦即決ではなく、双方が慎重な態度を取ったことが、数々の文書にて察しられる。

秀吉は、この戦いにおいて徳川家康を戦線におびき出し討ち果たすことを最大目的に、その機会を作り、それにはめ込もうと策していた。秀吉は、城の北から西、南へかけても、半円形に約3kmに及ぶ、高さ1丈（約3m）、幅14、5間（約25m）の堤を築き、そこに足近川の水を引き入れて城を水攻めにすることにした。5月11日より、将兵のみならず付近一帯の住民もかり集め、突貫工事を行った。この堤は「一夜堤」と呼ばれるが、実際には5、6日は要したと見られている。

不破源六広綱は20日間余りに及ぶ水攻めに降伏しました。秀吉による水攻めがいかなる規模のものだったのか、その址を追ってみました。竹鼻城周辺には秀吉によって築かれた「一夜堤」の碑が四ヶ所か見られます。蒲池交差点南東の一夜堤碑 羽島郵便局西向かい地の一夜堤碑 確認できたものは4ヶ所ですがこの4ヶ所を点と線で結べばぐるっと竹鼻城を包み込むように半周にかけて取り囲んだのであろう様子がわかります。その土木量たるや相当なものだった事でしょう。



羽島市営斎場西側の一夜堤碑



今町交差点西の一夜堤碑



蒲池交差点南東の一夜堤碑



羽島郵便局西向かい地の一夜堤碑

そしてこの城は関ヶ原の戦いにも前哨戦の地として再び巻き込まれます。西軍に呼応した織田秀信（信長嫡孫）の家臣、杉浦重勝が立て籠もりますが東軍の先鋒、福島正則らに城は落とされます。重勝は自害したようです。

城址碑と説明版が羽島市歴史民俗資料館の前に建てられています。



竹鼻城石柱と説明版



羽柴秀吉本陣の間島太閤山跡（羽島市福寿町間島）

次の羽島市地図で、鉄道は新幹線で駅は「岐阜羽島駅」です。そのすぐ下に「岐阜羽島インターチェンジ」が在り、東海環状自動車道を利用すれば東は「豊田・多治見・美濃加茂」へと行きます。このまま一般国道を北上すれば「柳津・岐阜県庁・岐阜市内・岐阜大学」へと繋がり、西へ行けば「安八・大垣・赤坂・大野・本巣」通って一周出来、羽島市は、岐阜地域の玄関となって発展が見込めます。その昔、交通の要衝として栄えた竹鼻町は、現在まさに復活の兆しが有るのです

③ 羽島市「中観音堂・円空資料館」の探訪

「中観音堂・円空資料館」では、加藤奨（かとうすすむ）氏により円空上人（えんくうしょうにん、以下円空）について、教えて頂きました。

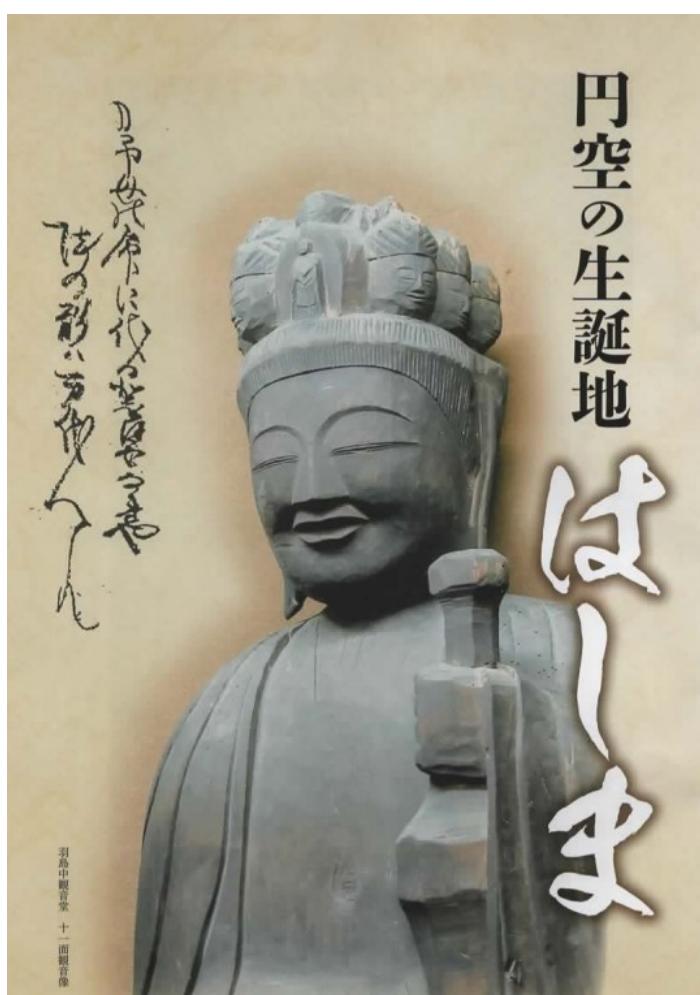
円空は、江戸時代前期（1632年～1695年）に美濃国（現在の岐阜県羽島市）で生まれた修行僧であり、仏師としても非常に特異な存在でした。その生涯で成し遂げたことを簡潔にまとめると、円空は、洪水で非業の死を遂げた母の供養のため出家して全国を行脚する放浪の旅に出ました。修験道の修行を経て、伊吹山の太平寺などで修行を積み、30歳頃から本格的に仏像制作を始めます。そして、その生涯に12万体の仏像を彫刻しました。円空生誕の地である羽島市の中では、一番多く円空仏が安置されており、本尊の「十一面観音像」（222cm）をはじめ17体の円空仏（県重要文化財）を間近に見ることができます。また、隣接して「円空上人産湯の井戸」があります。これらの仏像は「円空仏」と呼ばれ、素朴で力強い木彫りのスタイルが特徴です。「円空仏」は単なる美術品ではなく、庶民の心を癒すための「祈りのかたち」として彫られたもので精神的な救済を目指しています。円空の作品は、今も多くの人々に感動を与え続けており、羽島市の中観音堂・円空資料館ではその一部を間近で見ることができます。



現存するものは約 5400 体以上で素朴で力強い木彫りのスタイルが特徴です。「円空仏」は全国に分布しており、特に岐阜県（1600 体以上）と愛知県（3000 体以上）に集中しています。円空は「遊行僧」として全国を旅し、北海道から九州まで各地で仏像を彫りました。彼が生きた江戸時代前期（1632 年～1695 年）は、戦乱が収まりつつある一方で、庶民の生

活はまだ不安定で、精神的な救いを求める声が強くありました。病に苦しむ人々のために彫られたもので、薬師如来や不動明王、阿弥陀如来などが多く見られます。

「円空仏」は、そうした時代背景の中で生まれた「祈りのかたち」です。初期の作品は岐阜県郡上市や関市などに多く、後期は飛騨地方に集中しています。造像の記録は、神社の棟札や仏像の背銘（裏に書かれた墨書）などに残されており、最古の記録は1663年の神明神社（岐阜県郡上市）です。木材の選び方と活かし方円空は木材の性質を見極め、割れた部分や節をあえて使うことで、仏像に個性を与えました。木の持つ自然な力を「神聖なもの」として捉え、加工しすぎずにそのままの形を活かす姿勢が見られます。まるで木の中に仏が宿っているかのように、円空は木と対話しながら彫っていたのかもしれません。



円空仏の彫刻技法は、従来の仏像彫刻とは一線を画す、非常にユニークで革新的なものでした。円空の技法は「鉈彫り（なたぼり）」と呼ばれ、荒々しくも力強い造形が特徴です。

鉈（ナタ）や小刀を使って、木材を大胆に削る技法です。彫刻刀ではなく、荒削りの道具を使うことで、木の質感や生命力をそのままの表現が斬新で、彫り跡をあえて残すことで、仏像に躍動感と素朴さを与えています。また、一木造（いちぼくづくり）で、一本の木から仏像全体を彫り出すのも特徴です。木の割れや節をそのまま活かし、自然の形状を尊重し、木目や傷を仏像の表情や衣のしわとして取り込むことも工夫が有ります。円空は木材の質を見極め、割れた部

分や節をあえて使うことで、仏像に個性を性与えました。さらに 木端仏（こっぱぶつ）と言って、板切れや木片に簡素な顔や姿を彫った仏像で、一宿一飯の礼として庶民に配るため、短時間で彫れるよう工夫されていました。いずれも、素朴ながらも深い精神性を感じさせます。東北地方津軽平野の仏像は、蝦夷地（北海道）への渡海前後に彫られたとされ、旅の節目を感じさせる造形が見られます。表情の違いを楽しむ 優しい微笑み、怒りの表情、抽象的な顔立ちなど、仏像ごとに異なる「魂の表現」があります。一部の仏像には、円空が白山

神から受けた啓示を刻んだものもあり、仏像の裏側も見逃さずに見る事も大切です。東北の「円空仏」は、彼の旅の中でも比較的初期～中期の作品が多く、岐阜での作風と比べてより素朴で祈りの色が濃いものが多いと言われています。円空の旅は、まさに「祈りを刻む巡礼」でした。

円空仏の代表作一覧

仏像名	所在地	特徴・見どころ
十一面観音像	岐阜県羽島市・中観音堂	高さ222cmの大作。羽島市の円空資料館で展示されており、県重要文化財に指定。
両面宿儼坐像 (りょうめんすくなざぞう)	岐阜県高山市・千光寺	円空仏の中でも最も有名。両面に顔を持つ異形の神像で、力強く神秘的な造形。
狛犬像や十一面観音像など	岐阜県関市・洞戸円空記念館	円空の神像・仏像が多数展示。地元の小学生が彫った木端仏も並び、親しみやすい雰囲気。
約90体の円空仏を年代順で展示	岐阜県郡上市・美並ふるさと館(円空ふるさと館)	地元ガイドによる解説もあり、円空の生涯や作風の変遷がよく分かります。
愛染明王像	長野県飯山市・飯山寺	精緻な彫りと力強さが融合した作品。円空仏の中でも完成度が高いとされる。
聖観音菩薩立像	奈良県天川村・柄尾観音堂	優しい微笑みが印象的。円空仏の「癒し」の側面を象徴する作品。
八面荒神座像	北海道各制作地	荒々しい表情と炎神の造形が特徴。円空が北海道へ旅立つ前に制作。

これらの仏像は、円空が「祈り」と「癒し」を込めて彫ったもので、技術的な完成度よりも精神性が重視されています。特に両面宿儼坐像は、飛騨地方の伝説的存在をモチーフにしており、円空の創造力と信仰の深さを感じられる逸品です。

どの作品も、円空が木と対話しながら命を吹き込んだような温もりがあります。もし現地で見てみたい作品があれば、アクセス情報もお伝えできます。

東北の厳しい自然の中で、彼がどんな思いで仏像を彫ったのかを想像しながら鑑賞すると、より深い感動が得られます。東北地方にも円空の足跡はしっかりと残されており、彼が旅の途中で彫った仏像が各地に伝わっています。特に青森県や岩手県などには、円空仏の貴重な作例が現存しています。円空が北海道（蝦夷地）を訪れたのは寛文6年（1666年）頃で、35歳のときでした。これは彼の造像活動が始まって間もない時期で、非常に貴重な旅だったと考えられています。北海道に残る「円空仏」は、蝦夷地での円空の活動や旅行記録（菅江真澄や最上徳内など）、数々の円空像の存在が記されており、礼文華の小幌の窟屋などで仏像を造顕したことが分かっています。現在、北海道には42体以上の円空仏が確認されており、そのうち10体には山岳名が刻まれています。これは、円空が山岳修行僧としての視点から、蝦夷地の山々に祈りを捧げていた証です。円空は、当時ほとんど和人の往来がなかった蝦夷地に渡り、噴火や災害に苦しむ人々のために仏像を彫り、精神的な支えを提供しました。北海道の山々に登り、洞窟に籠って仏像を彫る姿は、まさに山岳信仰と民衆救済の融合です。晩年は岐阜県関市の弥勒寺を再興し、そこを拠点に活動。1695年、母を失った長良川のほとりで即身仏となり、64歳で生涯を閉じました。



羽島市中観音堂・円空資料館の前にて

④ あとがき

羽島市の歴史を皆さんと巡り、改めて地元の貴重な文化財の残された地域だと再認識ができた貴重な一日でした。特に岐阜東高校の先輩方の熱心さには「やりぬく精神」の伝統も感じられました。

(記録 第27期卒 安藤 誠)